

(2021 年文校夏季合宿用作品 テーマ「きん」 ※コロナ禍のためオンライン合宿)

オリンピックで金

津木林 洋

20xx 年、オリンピック陸上 100m 決勝に全く無名の選手が登場した。巨大な太腿に比べ足首は細く、まさにカモシカのごとくだった。予選を 9 秒そこそこのタイムで走り、決勝はなんと 8.90。断トツの 1 位だった。

それがゲノムドーピングの始まりである。遺伝子操作によって作り出された肉体で、それまでのドーピング検査では見つからない。当然対策が取られ、オリンピックに出場する選手は子供の時の遺伝子を提供することが義務づけられた。全ゲノム解析で、子供時代の遺伝子と異なっていれば出場できなくなった。

それから 20 数年、今度は四つ足で走る選手が登場した。まさにカモシカ体型である。受精時の遺伝子操作で作られているからゲノムドーピングに引っかからない。他にもキリン体型、イルカ体型などの選手も登場し、その対策をどうするかと侃々諤々の議論になった。

ある委員は言った。「選手は人間の体型をしていなければならない」

すると「人間の体型とは何か」と反論があり、その定義に延々と時間が費やされることになった。

その議論の行方を決めたのは観客である。それまで開催地を選ぶのに苦勞をしていたのが嘘のように、我も我もと世界中の都市が手を上げたのだ。人間離れした選手のパフォーマンスに皆が熱狂し、スタジアムは超満員になった。当然、ゲノムドーピングの議論は沙汰止みになった。

ゴリラ体型の柔道選手が相手を押しつぶして叫ぶ。

「オリンピックで金！」

(本文正味 600 字)